

# 心のまじり

## 高槻市内の神社めぐり

数年来、足、腰の治療に通っている先生のお勧めもあつて歩くことにし、高槻市内の神社を回ることにしました。

大阪神社庁の資料では高槻市内に、神社が48社あります。まず「素盞鳴尊神社」、治療に通うバスの中から見えていたので、ここから始めることにしました。

田んぼの真ん中にあつて、こじんまりした静かなたたずまいです。二礼二拍手一礼の正式参拝をしました。

ここから足を伸ばして清福寺町の阿久刀神社へ向かいます。気候もよく川沿いの道をテクテク歩いて。先ず一日目は2か所5147歩です。

次の日も出かけました。登美の里バス停まで歩き、桜ヶ丘南町の「春日神社」へお参りしました。

「八坂神社」「五百住神社」などいろいろ



**素盞鳴尊神社**

んな名前が書いてあります。バスに乗って津の江の「筑紫津神社」へ。ここは町中、いつでも住宅の建てこんだ中にあつて、なかなか場所がわかりません。二度も聞いてやっと探し当てました。

続いて近くの「稻荷神社」へ向かいます。こんもりとした木立の淋しいところでした。ちよつと怖かったのですが、お年寄りの方が子供さんのお守りをしておられたので助かりました。6614歩。

始めて見ると48社回るんだという目標があつて楽しく続けられそうでした。5月4回7社、6月3回7社、地図の上に赤マジックで歩いたところを入れながら、それがふえるのが楽しみでした。7、8月の暑い盛りも午前中には帰つてこられるようにしました。そして12月にはあと6社を残すのみとなりましたが、この6社は市内でも北の方の山手で、バスが1日数回というところもあり、行きはよくても帰りがありません。数時間待たねばならないというところで、そんなところは待合所もトイレもない。近くに喫茶店など

勿論ない。困っていると、主治医の先生が車で、田能(2社)、「一料鹿ヶ爪、杉生千ヶ谷、川久保の5社」連れて

行つてくださいました。残り1社は萩谷「諏訪神社」ですが、寒くなり年を越してしまいました。

春になつてしまいました。最後の萩谷へ向かいます。バス停につくと帰りのバスまで1時間ほどです。バスの来た道がそのまま登りになつて

続いていきます。少し行くと左手の山側に神社らしいところが見えます。案内近くで拍子抜けの感じ。石の鳥居を目指して坂を下り、「諏訪神社」に到着。最後の

お宮で感慨を込めて参拝しました。鳥居の右手にある樹高30mという杉の木も仰ぎ、綺麗な桐の花も見てバス停に戻りました。まだ時間は十分あります。辺りには人つ子一人いません。周囲の山や木立を眺めると、

名を知らない小鳥が枝から枝へ飛び移っています。バスが来ましたが乗客は私1人。やつと念願の48社を巡り終えとても幸せな気分でした。お陰さまで膝の方はすつかり快くなり、主治医の先生とお世話になつた高槻市バスさまに感謝しています。

私は考えられないくらいの方角音痴で、神社めぐりのときも、地図で調べて行くのですが、必ず道に迷い、その

度々に近くの方に尋ね尋ね

お世話になりました。カーナビを使おうかと思つたら、カーナビにはバス停は出ていません。今なら市のウォーキングアプリを使つて道に迷うこともなかったでしょうね。

ありがたいことに私は市バスの無料乗車証をいただいているので、ほとんどそのお世話になりました。心から感謝しています。

一つの希望は各神社に社由緒、来歴などが書いてあればいいのになと思ひました。(中には書いてあるところも少しはありました)

記：牧戸 富貴子

## 会員だより

### 熊野古道中辺路小雲越え

「現世への未練果てな

和歌山県田辺市から山に入り、熊野本宮目指して8回目となつた。参加し始めた3月は集合場所の梅田は新芽が出始めた頃で、今回の12月8日なら通常寒くて出発時間が1分でも待ち遠しいのに、今年には全然

寒いと感じない。並木の紅葉した葉もすっかり残っている。むしろ緑の葉が多い。紀伊半島の南端までの高速道路わきの景色はましてお

やである。今回泊りがけの



**平安衣装で参詣する母娘**

人となつたが、現世に未練があり、途中船底を割つて、小島に流れついた。それでも信徒はさらに船で海に送り出したというから信仰も狂信的になつていったのだろう。幸い金光坊を最後にして生き身で渡海のしきたりはなくなつたらしい。当時の船もが示してある。船というより小舟である。私は死後の極楽浄土を願うより現世で歩ける達成感を楽しまたい。近くに2011年女子サッカー、なでしこ、のFIFA優勝を記念して、モニメントと周りに選手足形が取り囲んでいた。この浜の宮出身の中村覚之助が東京高等師範学校在学中、サッカー指導書を翻訳対外試合を主導するなどサッカーの普及に努めたことが浜の宮、熊野三山の守りのヤタガラス、サッカーのシンボルマークの発想といわれている。いよいよ大門坂の鳥居をくぐり、まさに最後の王子社・多富気王子を経て、熊野那智大社と青岸渡寺へ向かった。さらに滝壺近くまで行ける飛瀧(ひろう)神社をはいり、日本一の高さを誇る那智の滝の冷気と霊気をいただき、明日へのフアイトが沸いてきた。

歩きツアードで、まず勝浦の海岸近くの熊野九十九王子の一つ、浜の宮王子についた。この道角にある振り分け石が伊勢路(伊勢からの熊野灘沿い)・中辺路(なかへじ、田辺から山中にはいる)・大辺路(おおへじ、紀伊半島に沿った山中か船旅)の分岐点を示している。昔の参詣者はこの海で潮垢離(しおごり)をして身を清め、熊野三山にむかった。この浜の宮神社の森続きに補陀洛山寺がある。「ふたらく」はサンスクリット語の「ボタラカ」の音訳で、南方彼方にある観音菩薩の住まう浄土の事をいい、平安時代から江戸時代までこの寺の住職がある年齢になり、修行も十分積まれたら、極楽浄土を求めて、わずかの油と食料を積んで、海に出て行った。井上靖の小説によると、住職金光坊は渡海上

記：上村 サト子